新時代の英語教育推進事業

外部講師の先生による指導・助言

～小学校編～

県教育庁義務教育課

英語教育実践リーダーが指導をいただいている先生方

- ○ 金森 強 先生（文教大学）
- ○ 太田 洋 先生（東京家政大学）
- ○ 酒井 英樹 先生（信州大学）
- ○ 町田 智久 先生（国際教養大学）
- ○ 阿野 幸一 先生（文教大学）
- ○ 佐藤 博晴 先生（山形大学）
- ○ 髙橋 一幸 先生（神奈川大学）
- ○ 阿部フォード 恵子 先生（CALAインターナショナル）

　英語教育実践リーダーは、年間を通じて様々な視点から実践へのご指導をいただきました。

　指導・助言の一部をご紹介しますので、先生方もご自身の実践を振り返り、授業改善に役立ててください。

<テーマ1>

単元づくりについて

単元づくりについて

目指す児童の姿を具体的に描く

　単元の言語活動における具体的な児童の発話例を、「A評価の例」「B評価の例」として事前に書いてみるとよいでしょう。

→　評価基準が明確になります。

単元づくりについて

児童にとって必要感のある学習にする

単元の目標を共有して、その達成のためには「〇〇の学習が必要だね」「〇〇するといいね」など、学習の内容や計画を逆向きに児童と話し合っていくとよいでしょう。

単元づくりについて

「知りたい」「伝えたい」意欲を引き出す工夫

（例）「単元：What would you like?」

①場面把握のために、地球儀を使ってNYの位置を確かめる。

②「どう伝えればハンバーガーを注文できるか」を児童に考えさせる。

③本単元では、より丁寧な注文のやり方を学習することを共有する。

<テーマ2>

言語活動について

言語活動について

児童が思考・判断する工夫

　使う表現を提示するのではなく、児童に考えさせるようにします。例えば、「I want ○○.」を使うように示すのではなく、「注文する」という場面を確認します。その中で、どのような表現を使えばよいかを児童が考えることが大切です。

言語活動について

話すこと［やり取り］の言語活動では

担任やALTがやり取りのモデルを示すことが大切です。黒板にやり取りの型を書いて示している実践も見られますが、児童の自然なやり取りを妨げる可能性があることに留意しなければなりません。

言語活動について

間違いは後で共有する

コミュニケーションを行っている間は、もし児童が間違えて発話していても、コミュニケーションを途切れさせず、指導者は、その場ではメモするなどに留めます。後でみんなで共有するのがよいでしょう。

<テーマ3>

中間指導について

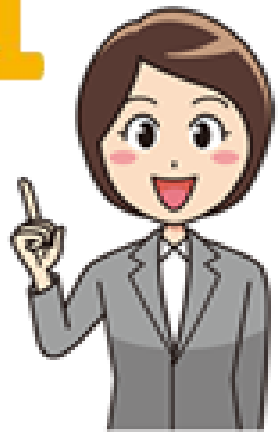
中間指導について

中間指導の焦点化

本時で「英語の正確さ」と「表現内容」のどちらに指導の焦点を当てるのかを明確にしたうえで、焦点に沿った中間指導の声がけを行い、児童に考えさせて気付かせるのがよいでしょう。

<テーマ4>

Small Talkについて



Small Talkについて

コミュニケーションとして行う

Small Talkは、単にモデルの提示ではなく、あくまでコミュニケーションとして行っていきます。その中で、単元で必要な語句や表現に児童が気付いていけるようにしましょう。

<テーマ5>

Inputについて

Inputについて

たくさんのInputを

１０のインプットをしても、３～４のアウトプットしか出てこないものです。アウトプットさせるためには、それよりはるかに多くのインプットが必要です。

Inputについて

場面を伴ったInputを

　新出語句や表現は、「場面」と切り離さずに示すようにしましょう。新出語句や表現がどのような場面で使われ、どのような意味を持つのかを、児童に気付かせるようにします。

Inputについて

i+1のInputを

「i」をその子がすでに持っている知識だとすると、
インプットの際に「i+1」の負荷をかけてみましょう。
これが新たな「i」となり、だんだん知識が増えていきます。

<テーマ6>

言葉の学びについて

言葉の学びについて

表現の意味を確認するときは

「How many?」や「What do you want?」などの意味を児童と確認する際は、「いくつ？」「何が欲しい？」と直訳的に指導するのではなく、「数を尋ねる表現だね」「欲しいものを尋ねる表現だね」などと指導することで、表現の意味を汎用的に捉える力につながります。

言葉の学びについて

小学校の発達段階を踏まえる

　発話の間違いを必要以上に矯正することで、英語の学習が苦手になってしまう児童もいます。

　間違えてもいいから伝えようと努力する児童の姿を価値付けていくことが大切です。

言葉の学びについて

英語を使う機会を

　表現を習得させようと「正確さ」ばかりの指導になると、英語で思いを伝えたいという意欲や自然なやり取りが立ち消えになってしまいます。「学ぶ＝使える」わけではないことを念頭におき、「英語を使う機会」を児童に与えることに価値を置いて指導することが大切です。

<テーマ7>

ALTとの授業について

ALTとの授業について

児童の発話内容を大切に

ALTには、児童が話した英語の「正確さ」より、話した「内容」を大切にして、コミュニケーションを行ったり、価値付けてもらいましょう。

ALTとの授業について

英語でのコミュニケーションのために

　ALTが活動等の指示を行うとき、指導者は日本語で補足せずに任せるようにします。ALTに指示の数を制限してもらったり、ジェスチャーを入れてもらったりして、児童が自分で英語を理解できるような支援をしていきましょう。

他にも…

他にも…

コミュニケーションの距離

　お互いが腕を伸ばすくらいの距離を保って話すようにすると、お互いの目を見るようになり、必然的に大きな声ではっきり話すことにつながります。

他にも…

「Why?」を大切に

自然に「Why?」が出てくる → 児童の主体的な態度の育成につながります。

（例）「行ってみたい場所を伝え合う場面」

A ： Where do you want to go?
B ： I want to go to Osaka.
A ： Oh, nice. Why?
B ： I want to eat ～.

他にも…

児童の見取りの工夫例

１時間に１～２班の児童に絞り、３回くらいで全員を見取る工夫があります。その際、やり取りであれば、「会話のキャッチボールができているか」という観点で見取る事例もあります。